

古塔のはなし

県統計課課長補佐 渡辺 武

最初からお墓の話で恐縮ですが、みなさんも先祖の年忌法要や彼岸などに、卒塔婆(塔婆)を墓にたて供養されることが多いと思います。昔は仏教で最高の供養は塔を建てることとされ、古代の権力者はこぞって仏塔を建立したわけですが、現代では簡略化され、板塔婆として墓に立てられています。

塔の起源はというと、それは仏教の発生と同じくインドです。最初の形は、土まんじゅうの上に貴人のしるしである傘型のものを立てたもので、これが仏舎利(釈迦の骨)を安置する墳墓にも用いられ、覆鉢型の一定の型式をもつようになったのです。インド語で、stūpa(スツーパー)と呼ばれ、中インドの一寒村サンチーの丘上には世界最古のスツーパーが現存しています。これが仏教の東漸とともに中国に渡り卒塔婆と音訳され、塔婆となり、さらに略して塔となったと言われています。その形状も中国では樓閣型に姿を変え、朝鮮半島をへて我が国に渡り、現在私たちが眼にすることができる風土に適した木造塔として姿を残しています。

我が国の塔のはじめは、敏達天皇14年(585年)に蘇我馬子が大野の丘の北(奈良県明日香村)に塔を建てたとの記事が日本書紀にみられますが、現存せず、その形状もさだかではありません。歴史上明らかな最初の仏塔は四天王寺や法興寺(飛鳥寺)の塔で、仏教の盛んであった飛鳥時代から奈良時代にかけては仏塔の建立ラッシュが続き、「塔影見えざる所なし」と言われるほどで、その数も100を超えたと思われます。また、平安時代後半の京都では相国寺の七重大塔、法勝寺の八角九重塔等100メートルを越す高塔が出現し、百塔巡礼が流行したことが史実に見られます。

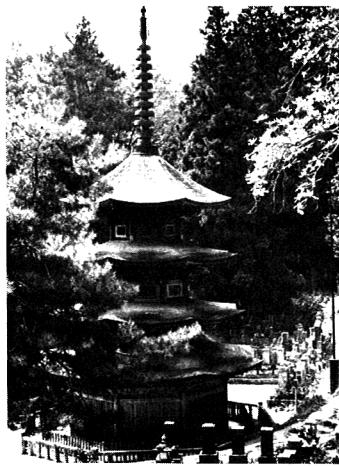
このような大和、京洛にみられた古塔の大半は、相つぐ戦乱や雷火、また明治初期の廃仏毀釈の嵐により姿を消し、塔の礎石にその趾をしのぶに過ぎません。

現存する最古の塔は、斑鳩の地(奈良県)に映える法隆寺五重塔、法起寺三重塔で、ともに雲斗、勾欄等の建築様式に飛鳥の古色を伝える名塔ですが、惜しまれるのは斑鳩三塔の一つであった法輪寺三重塔が昭和19年雷火で焼失したことです。(この塔は、昭和50年作家幸田文氏等の尽力で再建されました。)

このような塔は国内にどの位あるのでしょうか。現在、

文化財保護法により国宝に指定されているもの28塔、国指定重要文化財92塔、このほか県・市町村等の指定文化財や明治から昭和にかけて建立された近代塔を加えると300余塔に及びます。(小塔はのぞく) 地域別にみますと奈良、京都、兵庫、岡山等の府県が圧倒的に多く、北陸、山陰、九州、東北地方は極端に少いようです。

身近なところで関東甲信越地方に目を向けますと、何と言っても古塔のメッカは信州の塩田平です。見返りの塔として有名な大法寺三重塔(国宝・青木村)、「老の眼に観る日のありぬ別所なる唐風八角三重塔」と窪田空穂の歌碑のたつ本邦唯一の八角塔である安楽寺三重塔(国宝・上田市別所温泉)、未完の塔といわれる前山寺三重塔(重文・上田市前山)、火伏の塔で名高い国分寺三重塔(重文・上田市国分)と目を見張るばかりです。



国宝・安楽寺八角三重塔(長野県)

ところで本県はどうでしょう。県内唯一の国指定重要文化財である小山寺三重塔(別名富谷観音、岩瀬町)を筆頭に、薬王院三重塔(別名椎尾薬師、真壁町)、樂法寺多宝塔(別名雨引観音、大和村)、少し離れて竜ヶ崎市駒馬にある来迎院多宝塔、伊奈村にある願成寺三重塔(別名板橋不動尊)を見ることができます。また、近代の塔として昭和9年建立の村松虚空蔵多宝塔、昭和54年完成の護国寺三重塔(大洗町)がありますので、一度塔めぐりを試みられたらいかがでしょう。

最近のビッグニュースとしては、58年12月に完成をみた成田山大塔があります。

総工費50億、総高58メートルというジャンボ振り、さらに平間寺(別名川崎大師)には八角五重塔が昨年10月に出現、遠く高野山上には金剛峯寺東塔が再建されつつあると聞きます。ともに今年の弘法大師1150年御遠忌を記念しての産物です。

このように各地に点在する塔をめぐり続ける中で忘れられないのは、ある初冬の朝、五層の塔の軒に吊された風鐸が天空からの楽のように微妙に響きあう音色でした。それは朽ちゆく古塔の訴えとも聞きとれました。この歴史的遺産である塔の姿を後世に伝えるためにも、塔を愛し、その保護にも心を配りたいものです。

霜晨の 塔の風鐸 ひびきあう 武